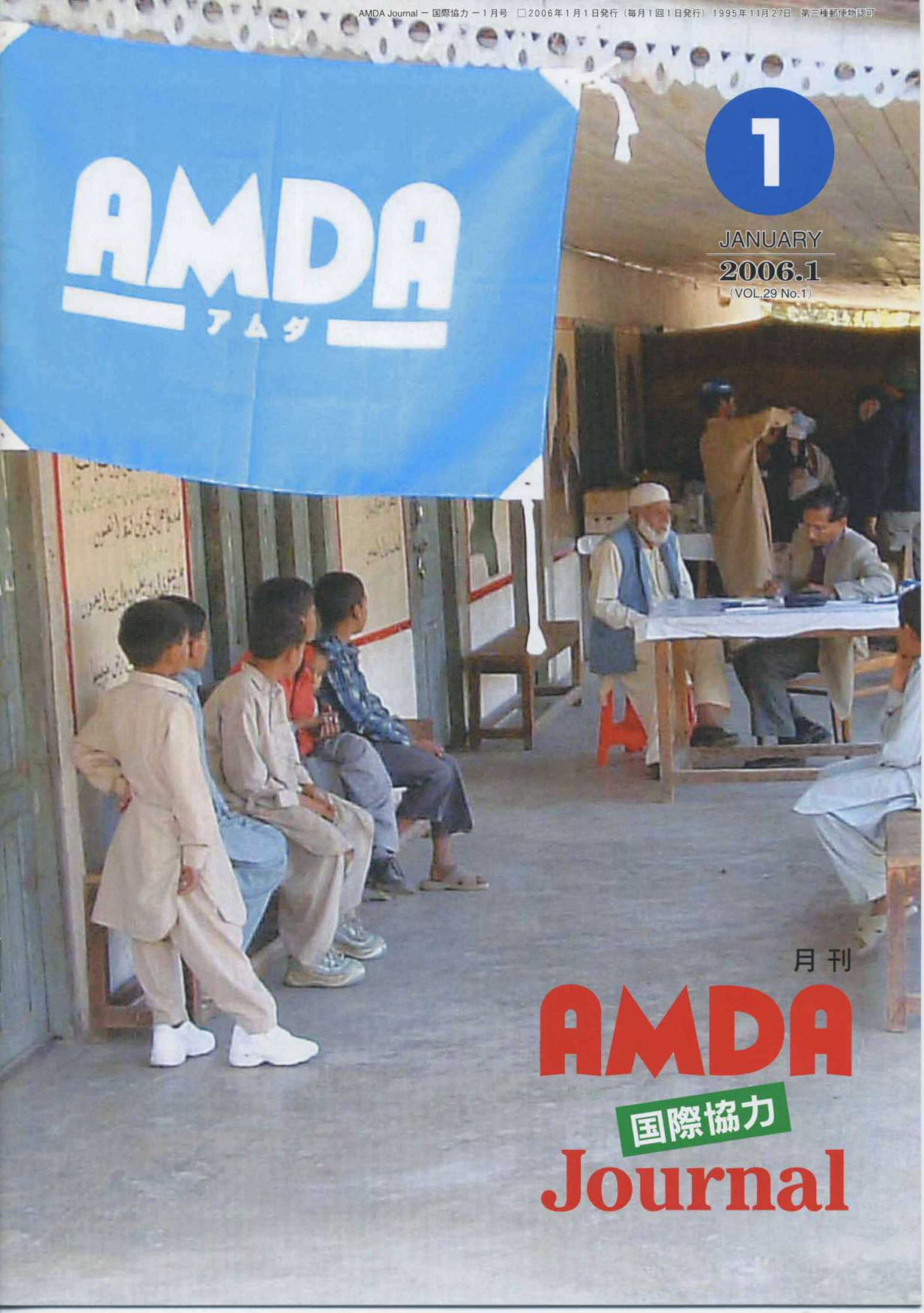
AMDA Journal ー 国際協力 ー 1月号 □2006年1月1日発行（毎月1回1日発行） 1995年11月27日 第三種郵便物認可



1
JANUARY
2006.1
(VOL.29 No.1)

月刊 AMDA 国際協力 Journal

スマトラ沖地震・津波復興支援プロジェクト（インドネシア）

ニアス島緊急復興支援
（仮設住宅建設）

バンダアチェにおける保健医療支援　↑
（人材育成プログラムと病院支援）

（心のケアと保健衛生教育）　→

パキスタン北部地震緊急救援プロジェクト

震源地に近いバラーコットの仮設診療所及びその周辺における診療活動

マンセラの政府系救急病院支援

（表紙の写真：バラーコットの学校の軒先を借り、テントを解体して建てたAMDA仮設診療所）

引き続きみな様からのご支援をよろしくお願いします。

第19回 AMDA International 国際会議

(2005.11.11～12)

※今回の会議で新たにマレーシア支部が加わり、AMDA海外支部は29カ国となりました。

AMDA
国際協力
Journal
2006
1月号

◇
CONTENTS

◇2006年新春を迎えて …… 1
◇緊急救援報告
アメリカ南部ハリケーン「カトリーナ」緊急支援活動 …… 5
パキスタン北部地震緊急救援活動 …… 8
中米グアテマラ豪雨被災者医療支援活動 …… 10
◇寄付者一覧 …… 12
◇2005秋のスタディツアー報告 …… 15

2006年新春を迎えて

AMDA代表　菅波　茂

明けましておめでとうございます。
本年もAMDA会員の皆様、ご支援者の皆様にとりまして良い一年でありますことを心からお祈り申し上げます。

スマトラ沖地震・津波緊急救援活動（インド・インドネシア・スリランカ）2004.12～2005.3

2005年はスマトラ沖地震・津波被災者への3カ国（インド、インドネシア、スリランカ）に及ぶ大規模緊急救援活動を始め、アメリカ南部ハリケーン「カトリーナ」やパキスタン北部地震被災者への緊急救援活動を、中長期の途上国（15カ国）での社会開発事業と並行して実施することができました。

またインドネシアでは、スマトラ沖地震・津波被災者への緊急救援活動から復興支援活動へと支援の形態を変えて中長期的な支援活動を開始しています。こうした支援活動が可能となりますのも、皆様からのご支援の御蔭と心より御礼申し上げます。

AMDA活動国と主な事業

・・・アジア・・・

カンボジア：AMDAカンボジアクリニック
保健ボランティア育成・巡回診療
ミャンマー：母子保健・エイズ予防・マイクロクレジット
コーカン特別地域基礎保健促進
子ども病院（栄養給食）
ネパール：ネパール子ども病院・ダマックAMDA病院
保健衛生改善・エイズ予防・保健人材育成
ブータン難民キャンプPHC
バングラデシュ：保健医療支援・マイクロクレジット
職業訓練
ベトナム：母子保健向上
スリランカ：医療和平
ワウニア地区保健サービス復興支援
パキスタン：アフガン支援
パキスタン医療システム支援
インドネシア：スマトラ沖地震・津波復興支援

・・・アフリカ・・・

ケニア：エイズ予防・青少年育成
ジブチ：難民医療支援
ザンビア：コミュニティ健康促進
スーダン：ダルフール医療支援

・・・中南米・・・

ペルー：エイズ予防
ボリビア：救急救命人材育成支援
ホンジュラス：エイズ予防
トロヘス・コミュニティ開発支援

・・・緊急救援活動・・・

スマトラ沖地震·津波
（インドネシア·スリランカ·インド）2004.12開始
インドネシア・ニアス島地震　2005.3開始
アメリカ南部ハリケーン「カトリーナ」2005.9開始
パキスタン北部地震　2005.10開始
中米グアテマラ豪雨　2005.11開始

この度は、AMDAの緊急救援活動の際、AMDA多国籍医師団を編成するAMDA Internationalの方針を紹介します。

2005年11月11日から2日間マレーシアの首都クアランプールに11ヶ国のAMDA海外支部長の参加の元に開催されたAMDA International国際会議で決定された項目について報告します。

1）新執行部発足
2）AMDA多国籍医師団活動の強化
3）次世代の人材育成推進
4）国連外交開始
5）フィールドスタディプログラムの整備

まず、「新執行部の発足」について紹介します。

2名の副代表の一人としてカナダ支部長のウイリアム・グラット医師が任命されました。主な役割は北米と中南米を合わせたアメリカリーグの強化と発展です。2005年には米国南部を襲ったハリケーン「カトリーナ」や中米グアテマラを襲ったハリケーン「スタン」などの自然災害が相次いで発生しました。

AMDA多国籍医師団の円滑な活動のためには、各国に支部を増やすことだけでなくアメリカリーグとしてのコミュニケーションの確立など多くの業務が残っています。AMDA沖縄の中南米における災害被災者救援活動との整合性の昇華も重要な要因です。もう1つの大切なことはAMDAが本年から開始予定の国連外交の場である米国との関係です。等身大の米国を知っているウイリアム・グラット医師の助言は不可欠と思っています。

もう一人の副代表として2年後にAMDA International国際会議開催地に決定した、インド支部長のM.H.カマト医師です。インドは東南アジア、南西アジア、中近東での紛争や災害に関する地理的要所に位置しています。かつてのバンドン会議に参加したアジア・アフリカの国々に大きな影響力をもっています。何よりもポスト中国として浮上してきています。次期国際会議開催までの2年間はインド支部強化に務めます。

2つある常任委員会の委員長が決まりました。緊急人道支援委員会の委員長はインドネシア支部長のA.H.タンラ医師、社会開発委員会にはネパール支部長のラメシュ・アーチェリア医師が選ばれました。ご承知のようにインドネシア支部はネパール支部と共に最も積極的にAMDA多国籍医師団に医療スタッフを派遣しています。また、ネパール支部は世界で初めてのNGOによる医科大学構想を推進しています。

次に「AMDA多国籍医師団活動の強化」について紹介します。紛争や災害被災者救援活動に大切なことは、悲しみの共有と死者に対する敬意です。

2000年から第二次世界大戦で亡くなられた方々への慰霊のために始めたASMP：AMDA「魂と医療のプログラム」を、2百年に1度と言われる大規模災害だったスマトラ沖地震・津波被災者救援活動を契機に、AMDA多国籍医師団が救援活動を行なった3カ国の災害被災者にも拡大することに決定しました。国際社会は宗教抜きには語れません。2005年12月に、インドネシアのバンダアチェ、スリランカのカルムナイそしてインドのチェンナイにおいて、日本からの聖職者と地元の聖職者との合同慰霊謝意を実施しました。

また、AMDA多国籍医師団が活動した災害等被災地には可能な限りAMDA Peace Clinicを設置・運営し、日本の支援者からのメッセージを伝え続けることになりました。

「被災地発緊急人道支援活動」を実現するために、AMDA海外支部は自国内で解決できる災害が発生した時に本部支援の決裁を待たずに独自に災害救援活動の開始ができることを決定しました。ただし、原則として予算枠が決められています。ドナーに対する説明義務、運営責任そして透明性が当然の義務となっています。「救える命があればどこへでも」というスローガンの実施のためにAMDA Emergency Fundに対するご支援を広く関係者の方々にお願いする考えです。

「次世代の人材育成推進」について説明します。AMDAも1984年に発足して以来、本年で22年になります。各国支部長の平均年齢も50歳台です。各国における社会的存在と影響力も確保してきています。10年後には一層の社会的活躍が期待できます。それと共にAMDA Internationalの活動を担う次世代の育成が急務になってきました。とりあえず、2つの常任委員会委員長の支部から若いスタッフを本部にインターンとして迎えることを検討していくことになりました。何よりも大切なことは、「A global network of Partnership for peace with Sogo-Fujo Spirit through Projects under Local Initiative」というAMDAの理念と使命をしっかりと理解して日常活動に反映してもらうこと。そして日本に対する理解を深めて親日になってもらうことです。

「国連外交開始」について説明します。2006年は現在の国連協議資格SpecialからGeneralへの収得をめざしています。Generalは議題提出権があります。取得が可能になった際にはニューヨークとジュネーブに事務所機能を開始したいと思っています。国際社会では沈黙は存在していないことを意味しています。AMDAの理念と使命に基づいて各国支部や姉妹団体からの積極的な議題を国連の場で提出できる日を夢見ています。

「フィールドスタディプログラムの整備」について説明します。AMDA各国支部はフィールドの現場を持っています。そしてすばらしい医師達やスタッフが活躍しています。AMDA設立22年間の歴史の蓄積であり財産です。21世紀を担う日本の若者のために日本では準備できない教育の場として整備をする予定です。国際理解や国際交流のみならず国際社会における問題解決能力の養成に役立つことができれば本望です。AMDAの使命は「平和へのパートナーシップ」という人間関係の世界規模のネットワーク形成です。原点は共に苦労をすることです。苦労を共にするためにはルールがあります。ローカルイニシアチブを尊重することです。歴史、文化、宗教そして共同体に関する見識は不可欠です。それに加えて平和、人権、公正などのコンセプトの理解と実践が伴わないと真の問題解決能力は期待できません。国際社会における問題解決能力は当然のことながら日本国内における問題解決能力としても役立つと考えています。

本年もこうしたAMDAの活動に対するご理解とご協力をよろしくお願い申し上げます。

AMDAの海外事業

AMDA事業担当理事　鈴木　俊介

新年おめでとうございます。旧年中は会員の皆様のご理解ご支援を賜り、心より御礼申し上げます。また今年も一層のご協力を賜りますようお願い申し上げます。

さて、現在私はこの原稿をインドネシア・スマトラ島の北東沖に浮かぶニアス島で書いている。以前小誌11月号の中で、3月末に発生した大地震によって被災した住民の復興支援に協力するため、AMDAはUNHCRの業務委託を受け、同島東部数ヶ村における住宅復旧とニアス島における輸入木材の活用状況のモニタリングを行っている旨ご紹介した。モニタリングは、ニアス全島の住宅復旧に活用される（UNHCRが調達する予定の）すべての木材のモニタリングであり、様々な支援組織との調整が必要である。

あれから1ヶ月半、まだ大きな成果は得られていない。当初北米から輸入する予定であった木材は、コスト面から折り合いがつかなかったことなどから、当面すべての木材をカリマンタン（インドネシア国内）から調達することになったと聞いている。しかし木材の切り出しが遅れているため、まだ第一便が到着していない。ただ、小誌が皆様のお手元に届く頃には到着した木材を最初の村まで運び込むことができていると予測している。

事業の進捗状況に関してはこれまでに数々の小さな変化が生まれた。20名を超える現地スタッフが雇用され、AMDAの旗の下、日々活動に専念している。できるだけ地元の雇用を促進するべく、2名を除きすべてニアス島出身者を選んだ。全体的に英語能力や学歴ではスマトラ島の都市部出身者に劣るものの、彼らはニアス語を話し、ニアスの風習を熟知している。中には、学生の時に他の都市へ出、そのまま就職したものの、地震で肉親を失ったり、実家が崩壊したりするなどして戻ってきた者もいる。彼らの給与体系は、個々の業務内容、生活レベル、同業他団体の傾向、地元の労働市場などを分析し定めた。NGOはこうした点で非常に柔軟性がある。この事業は一年間継続する予定であるが、一度出会って縁ができたのだから、皆に頑張って仕事を続けてもらいたいと思う。

一方、事業の受益者であるミュニティーでは村落復興委員会（Community Rehabilitation Committee, CRC）が組織され、委員会メンバーによる協力体制が整いつつある。このプログラムから村の誰と誰が（住宅提供という）利益を得るべきか、そして（地震により沈下した海岸線に住居を構えていた家族は、新たに土地の提供を受けなければならないが）誰の土地をどのように提供すべきか等々、村人たち、あるいはその代表者たちが決定すべき事項がいくつか

第19 th AMDA International 国際会議を終えて

2005年11月11・12日、マレーシア、クアラルンプールにおいて第19回AMDA Internationalの国際会議が行われました。1984年の初開催から現在まで（2001年まで毎年、その後は隔年）AMDAの各支部が開催国となって途切れることなく続いてきたAMDA Internationalの国際会議は、世界中に散らばる"AMDA International"というファミリーの確固たる絆と広がりを表していると言えそうです。本年は本部である日本を含めて12の支部から代表が参集し、通例どおり、一日目は医師・専門家としての活動に関する専門的発表を交換するアカデミック・コンファレンス、二日目はAMDA Internationalとしてのビジネスミーティングを行いました。

今年度のアカデミック・コンファレンスのテーマは"ASSISTING SOCIAL RECOVERY FROM CATASTROPHIC DISASTER"大災害後の社会復興支援でした。この言葉が示すとおり、AMDA Internationalの視野が、医療という一つの枠を越えて、被災者の精神面や社会面のケアを含めた総合的な人道支援へと広がっていることが、会議全体を通じて痛感されました。2004年末インド洋津波という未曾有の大災害に際した緊急救援を経験し、その後の復興活動を続けてきたAMDAのメンバー達にとって、このテーマは被災地の人々の紛れもない現実であり、これを共有しながら活動している実感が各報告にはあふれていました。

2日間という時間は短い時間でしたが、各々医師として地域の指導者として超多忙な日々を送られている各支部の先生方が、遠くはスーダン、コソボから遥々クアラルンプールに集まる時間を捻出するのは容易ではありません。ですから、その中で、意見を交わし、報告を行い、情報交換し、そしてお互いの信頼や友情を確かめ合う貴重な機会が、より意味深いものなのであり、長年にわたって育まれてきたこの信頼あってこそ、まさに緊急救援という逡巡の余裕も許されないときに、助けの手を差し延べあえる力強い関係があるのだと感じる会議でした。

AMDA International担当
大林　純子

ある。そして何よりも、住宅（と言っても造りは簡素であるが）を彼ら自身の手で建てなければならない。事業側は住宅建設のための資材や道具、そして研修を提供するが、手足を使い汗を流すのは彼らである。このような形の支援は決して易しくない。支援する側とっての大きな課題である。いずれにしても、こうしたプロセスを両者が把握した上で事業は進んでいく。11月末から12月初旬にかけて、10の区画で基礎工事が開始された。これから研修を開始し、平行して住民の手本となるモデル住宅の建設も開始される。今年末までに30区画において基礎工事が終了し、すでに数軒の住宅は完成している、というのがこの分野の活動において当面我々が目指している目標である。そしてもう一方のモニタリングチームは住宅復旧に携わる14の支援団体の事務所と活動予定地をこれまでにすべて訪問し、今後の活動に必要な情報を入手することができた。どちらも木材の到着を待つのみの状態である。

ところで、私はすぐ前の段落で「14の支援団体」と書いた。「支援団体」というのはインドネシアの政府機関（復興復旧庁）であり、国連機関（UNHABITAT）であり、国際赤十字であり、国際NGOであり、そして地元のNGOである。しかし現在、住宅復旧部門の支援に関して最も仕事が進んでいるのが国際NGOと赤十字である。敢えて名前は挙げないが、ドイツ、フランス、イタリア、ベルギーなどに本部を構えるNGOである。お隣のバンダ・アチェへ行っても、世界のどの地域へ行っても、人道支援、復興支援、開発支援の現場で実質的な仕事に携わっている主役の一人（一つ？）がNGOである。NGOなくしてこの分野の仕事は成り立たない、と言っても過言ではない。

NGOという言葉が頻繁に活用されて久しい。情報化社会の発達により情報の受発信が容易になったことと、様々な分野における国際化の恩恵により海外の出来事が身近になったことが、人道支援や開発支援に携わる主要なアクターとしてのNGOの存在をクローズアップさせることになったと言える。

NGOの中には第二次大戦後、戦争で疲弊した地域や敗戦国の復興過程で不足していた食料品や医薬品などを提供した団体も少なくない。また多くのNGOは、旧植民地であった国々における国づくりの過程で発生した数々の武力紛争の犠牲になった人々に手を差し伸べ、あるいは、不幸にも東西冷戦の渦に巻き込まれたことにより被った痛烈な痛みを軽減することに尽力してきた。そして、そうした国々の経済発展や地域開発の推進に貢献してきたのもNGOである。

欧米のNGOの多くは、少なからずキリスト教の影響を受けており、隣人への愛と慈悲の心を礎とする人道主義的な介入の正統性を訴える。一方において、本来キリスト教（特にプロテスタンティズム）は貪欲を悪と捉えるため、多くの信者はそうした活動を支えるための慈善活動を熱心に行う。寄付行為もその一つである。活動の正当性と寄付行為の奨励がキリスト教の後押しを受けているのである。市民社会が成熟する過程で、市民組織による活動が人々の生活を支えるという構図が、人々の精神生活に大きな影響を与える宗教の教義により裏書きされている・・・そうした社会の中で世界のNGOは発展してきたと言える。

また、時代時代の政府の枠組みや規模によってもNGO/NPOの役回りは異なってくる。小さな政府が良しとされる時代には、公共サービスの担い手として市民組織の役割が大きくなり、「ゆりかごから墓場まで」の幅広いサービスを政府が提供する時代には、市民組織がアクターとして活躍する範囲は狭くなる場合がある。

他のアジア社会（キリスト教が強い影響を持つフィリピンなどは除く）におけるNGOと同様、日本におけるNGOの歴史は浅く、植物の生育状態に例えるとまだ双葉状態であると言える。第二次世界大戦が終了してからおおよそ四半世紀後までに設立され、現在も活動を続けているNGOの多くは、その設立がキリスト教の精神に依拠しているか、政府の関与を多かれ少なかれ受けているかのどちらかである。70年代から80年代にかけて設立されたNGOは、ベトナム戦争とカンボジア内戦が大きく関係している。近年NGOに関する書籍が多く出版されているのでここでは詳細に触れないが、当時の青年達がアジアの友を支援したいという強い思いに衝き動かされた結果である。AMDAの創設者であり理事長の菅波茂氏も、当時タイやカンボジアへ出向いた青年の一人である。当時の菅波青年が何を見たのか・・・（ご興味のある方は『遥かなる夢』をご参照下さい）。

それから二十数年、欧米のNGOを育んできた土壌と同じ土壌が日本にあるとは言い難い。湾岸戦争以降「日本の顔が見えるODA」を具現化する一環として、政府（外務省や総務省：当時郵政省）によるNGO支援が実施されてきた。またNPO法の施行などにより苗床は整った。種は発芽したものの、そのまま欧米のNGOと同様の過程を経て大きく育つ可能性は高くない。農地はまだ耕されていない。それ故、太陽光と水分や養分を取り込むために一層の努力が必要となる。

組織が育つために必要な条件は、非営利組織であるNGOも営利組織も違いはない。人、金、物、情報、そして環境といった要素が整うことが肝要である。技術、知識それに知恵を持ち合わせた人と業務を遂行するために必要な資金や物資が集まり、業務遂行上、組織運営上欠かせない情報が収集・分析・活用され、そして組織が継続して活動していくことが可能になるための法的、社会的環境の整備が必要である。そしてNGOは、社会における自己の存在意義を明確にするため、その存在理由を理念、又はメッセージというかたちで社会に投げかける一方、活動の中にその理念を織り込み、事業関係者の方々に対して、そこから得られた成果をお返ししなければならない。AMDAの場合、メッセージを形作るキーワードとして「多様性の共存」、「相互扶助」、「今日と明日の家族の平和」、「地域振興と国際貢献」、「信頼と尊敬」などがある。今年も、そうしたAMDAの理念の一つ一つを、海外事業の中で一層具体化させ、存在意義をアピールしていきたいと考えている。

スマトラ島沖に浮かぶ人口70万人の小さな島は、住民自身による復旧活動の真っ只中である。肉親を失い、家屋を失った人々が悲しみや苦しみを乗り越え、震災前の、あるいはより豊かな生活を取り戻そうと努力している。AMDAの一員として、NGOの一員として、そうした彼らとともに働けることを嬉しく思い、また誇りに思う。今年も、会員の皆様の温かいお気持ちが、活動を通じて彼らの元へ届くよう、一層精進していきたい。

アメリカ南部ハリケーン『カトリーナ』緊急支援活動

AMDA登録看護師　保志門　澄江

ハリケーン・パーティー

『ねえ、ホシさんは避難するの？』友人Aから電話が入った。『あっそうか、またハリケーンがルイジアナに向かっているんだっけ…』。朝からまだTVを見ていなかった私は、その日のハリケーン情報を知らず、インターンの仲間達と明日の会合の打ち合わせを済ませたところであった。天気は晴れ、ハリケーン『カトリーナ』襲来2日前のできごとである。その時点でまだ多くの人々がこの『カトリーナ』を意識していなかった。海抜下に街が広がるニューオリンズでは、ハリケーンがメキシコ湾内に入るたび避難命令が出され、1週間前後職場や学校は閉鎖される。そして人々は家族や友人達と共に車を連ね安全といわれる場所へ避難する。これを地元では『ハリケーン・パーティー』と呼んでいた。しかし毎年3～4回も出される避難命令のたびにお金と時間そして体力を費やす『ハリケーン・パーティー』に参加を決意することは、人口の34%が貧困線以下を占め、約12万人が車を所有しないニューオリンズ市民や貧乏学生の私にとっても容易なことではなかった。その上これまでニューオリンズではハリケーンや嵐による被害もほとんどなく、数百年前に創り出された町並みがジャズの歴史と共に今も美しく残っていた。『ニューオリンズは大丈夫』そんな神話と、何度も聞き慣れてしまった『ハリケーン避難命令』が人々の危機管理を麻痺させ、避難の判断を鈍らせる原因ともなっていた。『私は病院の職員達とメディカルの寮に残ることに決めたけど…！?』。友人Aは、大学病院に隣接する医学部の寮に患者や職員らと残ることを決意したようだった。病院には発電機が設置されているため、街の電気が止まっても停電することはなく、病院に隣接する医学部寮も高層ビルであるため、少々の洪水では問題がないと思われた。『ホシさん猫飼ってるよね。寮はペット禁止だからこっちへの避難は無理だね。』そうなのだ、私は先週シェルターから子猫を引き取り飼い始めたばかりであった。その上、出張中の同居人の猫と車をあずかっていた。『猫達のために避難するか。』この決意がハリケーン前にニューオリンズを脱出した私と、そして脱出しなかった友人との運命を大きく分ける結果となった。

ハリケーン襲来前日の早朝、私は猫2匹を連れ、今にも壊れそうな同居人の車を運転し、隣人2家族と車3台連ね、ニューオリンズを脱出した。普段なら6時間で着くテキサスまでの道のりなのだが、今回は避難車の渋滞で延々24時間かけてヒューストンへたどり着いた。途中、渋滞と暑さに耐え切れずオーバーヒートし、煙を噴き上げている車を何台も見かけた。『無事たどり着いた～。』しかし市内のホテルやモーテルはニューオリンズから脱出した市民により予約で一杯で、しかもペットの持ち込みが禁止されているホテルがほとんどだった。『ハリケーン・パーティー』慣れをしていた隣人家族達は、一週間分の餌と共に愛犬をニューオリンズに残してきていた。そして予約していたホテルへ移動して行った。ペットを抱える私はホテルに泊まれず、ダラスに住む旧友に連絡を取り、さらに6時間の道のりを運転し無事たどり着くことに成功した。

ヒューストン市郊外のベトナム系キリスト教会運営の避難所で聞き取り調査を行う筆者

ニューオリンズを脱出しなかった友人のいた大学病院は、冠水したニューオリンズ市の中心に位置していた。そして堤防が破壊された直後より洪水の影響で、地下室に設置されていた発電機は作動せず、電気・水道・トイレが使えない状態となっていた。さらに病院にある麻薬をねらい、銃を持って押し入った略奪者達が病院内のあちらこちらを占拠し始め、学生たちで賑わっていた大学病院は、強盗や略奪者達が集う最悪の状態となっていた。ハリケーン襲来5日後、やっと救助にきた米軍のヘリにより、友人Aは他の病院職員や患者らと共に救出された。

米国にもAMDA（AMDA第一期支援事業）

『AMDAでは、ハリケーン被災者支援事業に参加する人材を探しています。』 ハリケーン襲来後6日目、避難先の友人宅で、日本の友人から電子メールが入った。『そうか、日本のAMDAが米国で活動を始めるのか!!』米国大学院で国際保健を専攻し、途上国における避難民支援について学んだばかりの私にとって、AMDAの事業に参加する事は、先進国における避難民支援を学ぶチャンスでもあった。その頃、まだ他の日本のNGOも米国の被災者支援活動を開始していなかった。私は自分の避難民手続きを終了後、一緒に避難してきた猫を友人宅に預け、さっそくAMDAの支援チームに合流することにした。

AMDA先遣隊の到着から遅れること5日、ハリケーン襲来12日後、AMDA本部の調整員2名と合流することができた。当時AMDAは、約24万人の避難民を受け入れたテキサス州ヒューストン市内に仮事務所を構え、大規模・小規模避難所の状況調査を終え、災害弱者の掘り起こしとその支援活動を模索していた。なぜならば今回のハリケーン被害では、冠水したニューオリンズ市に取り残された被災者達を救出開始するまでに5日間という期間を要した行政の対応の遅さに非難が集中していたが、その後の政府や連邦危機管理局（以後「FEMA」）の対応は比較的円滑に行なわれ、行政機関と民間機関、そしてボランティア団体を取り込ん

ニューオリンズ市郊外の漁港（上）、桟橋（中）、住宅地（下）被害状況

だ、みごとなまでの連携によって、すでに復興ステージに入っていたからである。被災者の住宅支援プログラムや医療支援プログラム、食料支援プログラム、そして教育プログラムなど官民一体となった支援がすでに開始され、また全米各州から寄せられた援助物資や寄付金、さらに約6万人ものボランティアによるサービスなど、被災者が少しでも早く復興ステージへ移行できるよう、様々なプログラムが開始されていた。そして政府は報道関係者向けに被災者状況や政府の政策などを、ヒューストン市内に設けられた大型避難所から連日配信していた。これにより人々は毎日最新の被災状況、さらに復興支援情報を得ることが可能となっていた。『さすがアメリカ!!』。これらの米国の行政機関と民間企業、そしてボランティア団体とのみごとな連帯活動に私は感動を覚えた。

災害弱者の存在

すべてが成功に、そして復興に向かっているように見える中でも、やはり災害弱者は存在していた。ベトナム戦争後米国へ移民してきた多くのベトナム人移民、そしてベトナム系アメリカ人である。彼らの多くがニューオリンズから南西メキシコ湾岸沿いの入り江や沼地に住み着き、移住し、漁業や水産加工業を営み、ベトナムコミュニティの中でベトナム文化を保ちつつ暮らしていた。そこはニューオリンズの中でも最も被害が大きかった3つの郡の中に位置していた。今回のハリケーンにより彼らの多くが、家や船、財産、職を一瞬にして失っていた。その上、英語が充分に話せない者も多く、言葉の障壁により、今回の救助関連の情報もなかなか伝わらず、路頭に迷っている人々や、家や財産に保険を掛けていなかったため、生活復興に全く目処が立たない人々が多く存在していた。そのようなベトナム系の被災者達を支援していたのが、ベトナム系キリスト教会や仏教会であった。彼らは教会の一部を避難所として被災者へ提供していた。

そこへ、ヒューストン市内の大規模避難所でアメリカ白人やアフリカ系アメリカ人と共に避難生活をしていた多くのベトナム系アメリカ人達が移動してきていた。これらベトナム系被災者が身を寄せる避難所は、アメリカ白人やアフリカ系アメリカ人が避難している大きな避難所と比べ、情報や寄付金、支援物資、ボランティアサービスにも乏しく、政府からのサポートも行き届きにくい状況で、生活が楽というわけではなかったが、ベトナム語による情報の確保と同郷の人々と暮らす精神的安心感、ベトナム系社会で生活が継続できるという、社会的相乗効果を求め、累計300名にのぼるベトナム系被災者がそこへ移動してきていた。そしてAMDAが特に注目したのが、ベトナミーズ・ドミニカン・シスターズというベトナム系キリスト教会の活動であった。この教会ではシスター達が順番で食事の支度をし、被災者達に暖かい食べ物を提供する傍ら、教会近くの空き住宅の大家さんと連絡を取り、住居を斡旋、さらには新住居の敷金の一部を貸し出しするなどの援助も行っていた。被災者の中には子供達も多く、近くの私立の学校へ被災者の子供達が通えるような支援も行っていた。また学校から帰宅した子供達の宿題の手伝いや、教会の裏庭に男女別の仮設シャワー室を設置し、バレーボールのネットを張り、被災者達とスポーツを通じた交流も楽しんでいた。このようなシスター達の献身的な支援とアジア的なのどかさのおかげか、身を寄せる多くのベトナム系被災者達は精神的に救われており、悲壮感に陥っていた当初の状況から、将来へ向け生活復興を開始する人々も見られるようになった。AMDAでは、同教会へ避難している被災者達が早期に生活復興を行えるよう、義援金や生活支援物資の供与を決定した。『いつかニューオリンズで会おうね。』私は心の中でベトナム人の持つエネルギーを信じつつ、AMDAの第一期支援活動を終えた。

ここがあのニューオリンズ？

ハリケーン『カトリーナ』が襲来して一ヶ月、ニューオリンズの一部の地域で帰還許可が下り、私もさっそく帰還することになった。避難先の友人達に別れを告げ、ニューオリンズの家を心配しながらも、ニューオリンズに帰れることで、内心ウキウキしていた。しかしテキサスからニューオリンズへ近づくにつれ、吹き飛んだ屋根や崩れた家、瓦礫、折れた木が増え、ハリケーンの爪あとを見せつけ始めた。空気はよどみ、どこもかしこもカビとゴミ、海産物の腐敗臭が入り混じったなんともいえない臭気を放っていた。『ここがあのニューオリンズ？』その変わり果てた姿に唖然とした。『ほんの一ヶ月人々が帰ってこなかっただけで、これほどまでに街が変わるものなのだろうか！?』。洪水のあった地域は、風害も加わり、多くの建物の屋根が吹き飛

び、窓ガラスが割れ、建物の外壁は崩れ、その色は失われ、草木は枯れ果て、路上に駐車してあった自動車は泥水をかぶり、すべてが土色に変わっていた。また浸水家屋の中は、家の中で竜巻が発生したのではないかと思わせるほど、家具や本、腐敗した食料品などが散乱し、じゅうたんは腐り、壁は一面色とりどりのカビに覆われ、有害物質が混入した汚泥が堆積し、無数の蝿や害虫が発生し、もれたガスと湿った空気が混ざり合い、異様な腐敗臭が発生していた。さらに水道や電気などの生活インフラもほとんど回復していない劣悪な環境の中、被災住民による復興活動が始まった。

環境保全局やルイジアナ環境省、米国感染症予防センターでは、帰還した住民に対し、細菌やカビなどの微生物によって引き起こされるアレルギーや呼吸器障害、崩れた家の破片や折れた木による怪我、汚泥に含まれた化学物質や、アスベストや鉛塗料の粉塵により健康障害を引き起こすことや、蚊の媒体による西ナイル熱やデング熱といった感染症の発生など、数え上げればきりが無いほどの環境汚染や健康への影響を懸念していた。そのため呼吸器や目の健康被害を予防するマスクやゴーグル、手袋の着用、防蚊剤の塗布、手洗いやうがいなどを奨励していたが、物質的援助はみられず、多くの帰還者達は手袋だけ着用し復興作業を行っていた。

AMDA第二期支援事業

『こんな環境で復興活動を続けたら、みんなが病気になってしまう！』ニューオリンズの復興活動に危機感を抱いた私は、AMDA本部へこの状況報告をすると共に、市内で最も被害が大きい3郡について被災状況の調査とニーズ調査を行った。その結果、ベトナム系アメリカ人が多く住む南西メキシコ湾岸沿いの入り江や沼地が多い地区は、街全体が破壊され、復興すら困難なのではないかと思ってしまうほどの被災状況だった。しかし、そんな状況下でも、この3郡のベトナム人教会を総括するベトナム系教会が中心となり、住民の復興活動に向け動き始めていた。この教会では、ベトナム系の神父達が中心となり、全米各州から復興支援に訪れたボランティア達とともに、住民達の家の掃除や補修などの支援を行っていた。また、この教会自体も他の被災地同様、電気や水道、トイレ等の生活インフラは全く回復していなかったが、帰還した住民達やボランティア達の避難所として機能し始めていた。『おうAMDA!!テキサスの教会にも来ていたよね！また会えたね!!』教会にいたひとりの神父が声をかけてきた。テキサスのベトナミーズ・ドミニカン・シスターズへ避難している時に、AMDAの活動を見ていたらしい。私は何か彼らの役立てることがないか模索していたところだったので、その神父やボランティアの中心となる人物に対しニーズ調査を行い、復興支援に役立つものについて協議した。やはり彼らも、ボランティアや帰還した住民達の健康被害についてかなり懸念しており、健康被害の予防具が不足していることが浮き彫りになった。

これらの事態を鑑みAMDAでは、第一期支援活動に引き続きベトナム系アメリカ人被災者に対する生活再建物資の配布を決定。支援物資には、マスクや手袋、ゴーグルや予防着といった健康被害予防具を中心とした清掃用具を盛り込み、被災者の生活再建に直結した援助を行うこととした。トラックに積み込まれた500世帯2000人分の援助物資を教会まで運びこむと、すぐに滞在中のボランティア達が集まり運搬作業に入った。やはりアジア人らしいすばらしいチームワークである。また異国の地アメリカで、アジア人同士助け合えたことは、同じくアジア人である私にとって、精神的にも充実感を覚えるものであった。

最後に

ハリケーン『カトリーナ』が襲来し3ヶ月が過ぎ、ニューオリンズにも冬がやってきている。テント暮らしをしていた人々も、シェルターやFEMAが提供しているコンテナへ移り住むようになった。現在ではニューオリンズのすべての地域で帰還許可がおりたが、特に被害の甚大な地域においては、市長より『見た後はすぐに立ち去れ』と警告が出され、復興活動は未だ停止した状況であると言わざるを得ない。また環境調査の結果、カビによる空気汚染が蔓延しており、化学物質や汚泥による健康被害の可能性も指摘され、ニューオリンズが音楽で賑わった昔の姿を取り戻すには十年近くかかるだろうともいわれている。このような劣悪な環境の中でも、ニューオリンズで生まれ育ち、この街を心から愛する人々は続々と帰還している。ハリケーン『カトリーナ』で被災し、社会的にもサポートが行き届きにくいとされるベトナム系アメリカ人達にとってもニューオリンズはベトナムに次ぐ第二の故郷である。テキサス州で行ったAMDAの活動を覚えていた彼ら被災者にとって、AMDAがこれまで米国のテキサスとニューオリンズで行ってきた支援事業は、ベトナム系被災者を含む多くの災害弱者の社会復興の支えとなり、健康被害の予防的にも精神的にも大きく裨益していると思われた。

ベトナム系教会へ生活再建物資を届けた筆者（左）と安田寿哉調整員（右）

青山の被災地―パキスタン北部地震緊急救援活動・前編―

AMDA本部職員　佐伯　美苗

2005年10月8日、その日わたしは2ヶ月におよぶパキスタン出張をどうにか終えようとしていました。

駐在の吉川勝貴氏が一時帰国中、舵取りの難しいクェッタ事務所で全権委任を拝命し、予算管理、人事・労務、会計等々、胃の痛くなるような局面を低空飛行ながらなんとかしのぎ、あと1週間で帰国するときには懸案事項はすべて完了しているはず、という日でした。お昼には医療調整員の原口珠代氏もスーダンでのミッションを終えて帰任することになっていました。

M6.8（当初政府発表）、被害はインド、パキスタン、アフガニスタンにまたがる…第一報以降も限られた情報の中で「一大事になる」との危機感を募らせながらも、重要案件を抱えて慢性的な人手不足のクェッタ事務所、スーダン事業に加え、相次ぐ災害救援のためにすでに過負荷状態をも通り越している本部担当・柳田展秀氏のことを思えば、TV画面を変えるように思考を切り替えることはひじょうに困難でした。AMDAは、地震といえば闇雲に飛び出してゆくイメージが定着しているようで、こんな裏話は幻滅させるかもしれません。しかし、使い方を間違えているかもしれませんが、だれもが四面楚歌の心境でした。ただし、われわれには、汝を如何せんと、と思いやる恋人がいないだけまし（？）かもしれません。被災は山岳地帯で広範囲にわたり、しかも通常なら外国NGOがおいそれと入れる地域ではないため、そもそも支援を必要としている人たちのところに行き着けるのか、という不安を抱きつつ、そろそろと準備を整え始めました。

まず「ERネットワーク」登録者への呼びかけを行ない、総領事館など国内関係機関との情報交換、関係者の安否確認、刻々と移り変わる被災地の情報、被災地で連携可能な団体の情報確認、予定はすべてキャンセル、現金の確認、留守中の業務指示、国内航空便の確認…と、翌日の明け方までにクェッタ事務所の業務を一時凍結する一方、緊急支援の体制を整えていきました。

クェッタ事務所のあるバローチスタン州と今回の被災地は、1000km程度離れています。かたや沙漠、かたや山岳地帯と標高差はどれくらいだったか、その距離の故に、当初州内の関係機関のほとんどは他人事として受け止めていました。しかし、さすがにアフガニスタン支援、イラク避難民救援、イラン地震救援と、緊急救援の拠点として本部の裏方を務めてきたクェッタ事務所です。休日にも関わらず、スタッフは準備を着々とすすめていきました。

さらに出発前、長らくアフガン難民支援のカウンターパートである「アフガン難民代表部」（CAR）の幹部が、電話で面会予約を取り消して詫びるわたしにこう言われました。「この危難の時に即行動を起こしたAMDAをバロチスタンの誇りに思うよ。そして、パキスタン人の一人として心から礼を言わねばならん。」そしてパキスタン人の決まり文句。「なんかあったらいつでもオレに言って来い！」。

マンセラ郡のはずれの村でイランからの支援チーム（左）と情報交換を行なう。後にこのイランチームと、重症者の搬送先として協力関係を結ぶ。

パキスタンは、この3日前にラマザン（斎戒月）に入っていました。ラマザン月の生活は、敢えて否定的なことばかり列ねますが、スタッフの動きが緩慢になり、お店や役所の業務時間が短縮され、日中町中で食べ物が手に入りにくくなることを意味します。日のあるうちは食べ物を口にしないという単純な「断食」というだけでなく、人々の生活そのもののリズムが大きく変わり、先月と同じペースで事が運ばなくなるという、異教徒にとってはまことに歯がゆいやらつらいやら、フラストレーションの強まる月なのでした。のっけから今回のERでもその影響はありました。イスラマバドではお店が夕方にしか開かないために購入のタイミングを逃しかけたり、運転手氏が車を停めてお祈りとイフタール（断食明けの軽食）にするため、早く帰らねばと焦る胸をさすりながらつきあったり、そっと車の蔭に隠れてあたりを気にしつつピスタチオをほおばったり…ラマザンの苦労といえば、やはり食事の恨み言が多くなるようです。

本部や支部から来られた医療職にはラマザンと初めて遭遇した方もおられましたので、大量に間食用のビスケットやチョコレートを用意し、すばやく、そして手軽に血糖値維持に努めていただきました。

さて、発災翌日の便で首都に移動し、各地の被災状況や支援の需要を調べたり、各援助機関の方針や活動地などを確認するとともに、必要な物品を揃え始めました。10日には活動地に予定したマンセラ（Mansehra）とバラコート（Balakot）を目指して状況調査を重ね、医療チームを受け入れたいという村、ブラールコットまたはバラーコット（Brarkot）に行き着いたのは、ようやく10月12日のことでした。

バラーコットは標高1200 m程度でしょうか、すでに朝晩の息は白く、峨峨たる山々の頂きを遠くに望む小さな村でした。連絡と物資調達の拠点として選んだアボッタバド（Abbottabad）から3時間程度、しかし最も近い町はじつはカシミール側のムザッファラバド（Muzzaffarabad）で、片道30分程度で行きつけるところでした。

青く澄んだ空は高く、川のせせらぎが小さく聞こえ、周りを囲む山は緑に覆われ、家の庭、畑も緑、その中でヤギやウシがもそもそと草を食んでいま

す。その中で大半の家屋がぐしゃりとつぶれているのは、一種異様な光景です。

地元の人によると、古い家屋は比較的頑丈にできているのですが、最近は原料費の高騰のため、コンクリート製のブロックを積んだだけの安易な建築が増え、それが今回の地震でひとたまりもなかったということでした。コンクリートのかたまりが人間の上に落ちてきたわけです。食器や農具といっしょに。私たちは声もなく、多くの人の上になだれをうったコンクリートブロックの残骸を、今やのどやかに冬の日を浴びている残骸を、見つめていました。

この村にはすでにパキスタンの他の町から送られてきた医療チームが診療を開始していたのですが、どうかこの村で診療してほしいと、村の男性たちから意外にも懇請を受けました。理由は、AMDAが女性の医師を連れてきていたからです。女性たちに女性の医師による診察を受けさせたいのは、じつは女性自身よりも彼女らの夫や父や兄弟なのです。

そのようなわけで、初日から女性の診察室は盛況でした。男性用診察ブースも多くの男性患者で溢れ、3人の医師だけではなく、補助するわれわれコーディネイターもてんてこまいになりました。この村は、ムザッファラバドに近いために、男たちの大半はそこに働きに出かけています。ムザッファラバドの学校に通っている子どもも多く、住民の中で死傷者はかなりの数にのぼるはずなのですが、ムザッファラバド側で被災者にカウントされ、手当を受けたために、それが正確に把握できたのは、地震から10日近く経ってからのことでした。

ある男の子は、ムザッファラバドの学校に通っていて被災しました。教室にいて崩れた壁の下敷きになりかけたそうです。まだ痛むのか、多くの級友を亡くしたからなのか、この少年は黒目がちの瞳をずっと伏せたままでした。帰るときも父親が支えるように付き添っていきました。

ある老婆は声高に嘆きながら、両腕を近所の奥さん方に支えられてようよう歩いてやってきました。身も世もあらぬ嘆き方に、慌てて介添えをしながらどこが痛むかと尋ねると、息子が家の下敷きになって亡くなったということでした。彼女自身も下半身が下敷きになったそうなので痛みは相当のはずなのですが、自分の身体のことにはまったく関心を向けられないようなのです。亡くなった息子のことだけを、診察中も帰りも嘆いて、近所の人たちになだめられていました。

少年はムザッファラバドの学校で被災し、鎖骨などに怪我を負った。ムザッファラバドで応急処置を受けたが、実家のあるこの村では継続治療が受けられなかった。診察はネパール支部のゴビンダ医師。

わたしは彼女の右腕を支えて歩きながら、思わず話しかけていました。「すべては神様のご意志なのだから、身体を大事にしてね。」通じるわけはないのですが、別れ際老婆はわたしに抱擁の挨拶をするしぐさをしながら、神様のご意志（マーシャッラー）、神様のご意志、と繰り返していました。この慣用句がこんなに切ない響きとは、と思うのは外国人の感傷でしょうか。

このようにして、AMDAの医療キャンプは開始されました。翌日には原口医療調整員がクェッタから参入、すぐに診察データの収集がシステム化され、テントでは対応しきれない患者のために搬送先を検討することも始められました。頼もしい彼女を軸にしてまわり始めたキャンプは、この後11月のラマザン明けまで継続され、惜しまれながら地元のチームに引き継がれました。

吉川氏とわたしは交代でクェッタ事務所とイスラマバドとキャンプを往復し、特に吉川氏はイスラマバドでの援助機関の会議でAMDAの活動を報告し、日本のNGOをしっかりアピールする一方、ニーズ調査を丁寧に行ない、AMDA多国籍医師団の活動を調整するなど、八面六臂の活躍を示したのでした。

10月の終わりごろ、毎朝毎晩アボッタバドからキャンプを往復するのに通ううねうねとした山道には、ヒツジやヤギ、ウシの群れと出会う回数が増えたことに気づきました。からからとたくさんの鈴が同じリズムで鳴り、率れている牧畜民は細いムチも持ってゆっくり歩いてゆきます。

発災直後、この峠と峠を繋ぐ道路では救急車がけたたましくひっきりなしに行き交い、あちこちに事故を起こしたトラックや自家用車が立ち往生していました。沿道の崖に鼻面をめりこませているトラックもあり、追突事故を起こした車の運転手が血相を変えてがなりたてていたりと殺気立っているうえ、家財と家族を積んで町を出る車と物資を満載して町に入る車とで混み合うために、渋滞が延々続いている、そういう状態がずっと続いていた道でした。

この光景の変化は、車輌の通行量が減ったことと、被災地が徐々に落ち着いて人々が生活を建て直しつつあることを示すと同時に、さらに地震のために冬営地がつぶれてしまったか家屋が崩れたかして、高地で暮している牧畜民が冬営地と家を求めて下りてきた、ということなのでした。牧畜を生業とする人たちの土地使用権はひじょうに細かく定められており、今後町に近い地域で牧草地争いが起きる可能性もあります。

こんなところにも山岳地帯の災害が影響しているのでした。

この拙文をご覧頂ける頃には、アフリカへ毛布を送る運動推進委員会事務局様のご協力により、冬をしのぐための毛布をクェッタ事務所のスタッフが被災地に運びこんでいるはずです。

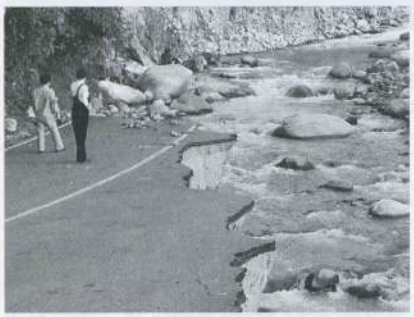
災害が続きましたが、皆様のあたたかなご芳志に深く感謝するとともに、次回、事業のさらに詳細な経過を皆様にお伝えし、ご支援のお礼に代えさせていただきたく思います。引き続きよろしくお願い致します。

最後になりましたが、2006年も皆様お健やかに過ごされますようお祈りしております。

グアテマラ豪雨被災者医療支援活動

AMDAホンジュラス　渡辺　咲子（調整員）

中米グアテマラ共和国では、10月にハリケーン「スタン（STAN）」による集中豪雨に見舞われ、被災者約45万人、死者・行方不明者約1500人（10月28日現在・国連報告）と伝えられた。AMDAは特に被害が大きく孤立状態となり、医療ニーズが非常に高いグアテマラ西部サン・マルコス（San　Marcos）県在住の日本人コミュニティからの支援要請を受け、同国厚生省県保健局及びJICAグアテマラ駐在員事務所の協力のもと、医療支援活動を実施した。



患者への処置を行う、看護師でもある筆者

災害発生当時、ホンジュラスでもグアテマラの被害は毎日のように大きく新聞やテレビで報道されていた。AMDA本部から連絡があるのではないか？この状況は日本ではどのよう報道されているのだろうかと、インターネットで毎日、日本の情報を得ようとしても、中米に関する記事はほんの僅かであった。そんな中、パキスタン北部地震発生、グアテマラ災害は忘れられた存在となった。AMDAホンジュラス事務所では、エルサルバドル大地震医療救援経験のあるスタッフが「グアテマラ救済はAMDAの使命ではないか、必要としている人達がすぐそこにいるのに、なにもできないのか、僕はいつでも出かけられる。」という言葉が飛んできた。ホンジュラスから空路1時間、陸路でも12時間で首都グアテマラ・シティに到着できる。手の届くところに助けを必要としている人がいる。

災害被害の情報が復興事業情報に変わりかけてきた中、「AMDA医療救援に関して、独立行政法人国際協力機構（JICA）グアテマラ事務所が調整業務の協力を行っていただける、日本からは沖縄支部の医師を1名派遣する、ホンジュラスでもスタッフの手配を」と、本部から連絡が入った。

早速、AMDAホンジュラス協力医師達に連絡。3年ほど前、キューバ人医師団と協力した無医村への巡回診療にボランティアで参加してくれたホンジュラス人メヒア医師へ。彼から「参加の意志は100%、3日後には返事ができる。」とうれしい返答があった。しかし、本人の意思は100%あっても、職場の許可が下りなくては派遣することはできない。その3日間は、緊急救援調整の経験のない私にとって、どれほど不安であったか。幸いにも3日後に彼から「99%大丈夫、心配しないで」と、うれしい返事が返ってきた。

11月7日、ホンジュラス事務所スタッフと共に、空路でグアテマラ入り。JICAグアテマラ事務所で診療調整、薬品調達業務を開始。ホンジュラスでの経験から、診療予定患者数500人分の薬品購入予算は十分だと考えていた。しかし、JICAグアテマラ事務所スタッフが取った見積書を見て、グアテマラ、ホンジュラスの物価の違いに驚かされてしまった。製薬会社からの見積書であっても、ホンジュラスの薬局で購入できるのと同様にはとても購入できない。しかも、次の日までに500人分の薬品を調達しなければ診療計画が崩れてしまう。すでに、診療予定地サン・マルコス県では、各村に診療のための宣伝が流されていると聞かされていた。

ここで泣いても仕方がない、同じ泣くなら業者に泣き付こうと、AMDA多国籍医師団の派遣経緯、診療計画、必要な薬品数、"グアテマラを救うのは、私たちのだけの使命ではなく、グアテマラ政府、民間の使命だ。"と文書に付け加え、交渉開始。残念ながら当日に返答は一社からも来なかった。

11月8日、昨日の泣き付き計画の成果が見えてきた。10社ほど交渉した結果、4社が安価で薬品を販売してくれることになった。また、JICAスタッフから、実はグアテマラには保健省、社会保険病院が購入している製薬会社がある。しかし、そこで購入できるのは、保健省、社会保険事務所に限られており、NGOでは購入できないと言うことで諦めていたが、昨日の交渉を見ていて、サン・マルコス県保健局になんとか保健局経由で薬品を購入できないかと交渉を始めていた。午後3時には、サン・マルコス県保健局から薬品購入許可書が送られてきた。こうして無事に薬品調達を終えることができた。どうやら、泣き付き攻撃は、JICAスタッフにも他の意味で効果があったようだ。

深夜、日本から派遣された渡久地医師とホンジュラスからのメヒア医師と合流した。

11月9日、昨日購入した薬品を車に詰め、首都を出発。目的地サン・マルコス県保健局まで約270km、途中何箇所も土砂崩れのあとや、道路が陥没、切断され、復興工事が行われていた。サン・マルコス県保健局では、AMDA多国籍医師団派遣に積極的に調整作業を進めてくださった、サン・マルコス市在住日本人山口景子さんと保健局職員にお会いし、被害状況の説明を受けた。山口さんはアメリカの大学の博士課程に在籍し、サン・マルコス県での母子保健プロジェクト評価調査の実施途中にこの災害に遭遇された。

11月10から12日までタカナ市内マハダ村、サックキン村、ピンピン村で診療を行った。タカナ市は標高2,800m、朝晩は10℃以下になる。

患者は、感冒、呼吸器感染症、胃腸疾患が主な疾患であった。災害後、飲み水の汚染の可能性が高く、診療に訪れた患者すべてに、駆虫剤の投与を行った。

診療2日目、サックキン村へ。途中今回の災害でタカナ市内一番の被害を受けたグア・デ・タカナを訪問。ここは、タカナ市中心部から5分のところにあり、土砂崩れにより50名以上が生き埋めになった。保健所より同行していただいたカラランピオ・ペレス（教育担当）氏のお姉さん家族もその被害を受け、家族4人中3人が生き埋め、幼い子どもが一人救助された。

この地区の教会に避難していた住民や、アメリカへ密入国しようとしてい

巡回診療するメヒア医師（右）

たホンジュラス人、エルサルバドル人もすべて生き埋めになった。被災者の救助は降り続く豪雨と大量の土砂で困難を極め、被災者の救援は難航した。グアテマラ政府はこの地を聖なる地（Campo Santo）とし、災害発生後2週間で、被害者の救助、遺体収容を断念した。

診療4日目（11月13日）、サンペドロ・デ・サカテペケ市ピエドラ・グランデ村内の小学校を借りて診療を開始した。保健所所長の話によると、同村住民約5,000人、土石流の被害者死者52名、行方不明6名の被害を受けた。村内にはこの災害によって、孤児になった子どもも多くいる。

診療には、男性の姿も多く見られた。この診療場所での特徴は、土石流被害の恐怖がいまだにトラウマとなり、不眠や精神不安を訴える患者、小児の食欲不振が多くみられた。なかには熱心に耳を傾ける医師の前で涙を流す老人もみられた。

診療終了後、ピエドラ・グランデ村ドローレス地区の土石流被害地を訪問。被害地には川は流れていなかったが、土石流の後は川が干からびたように村を縦断している。大きな岩の間には、住居跡を示す赤い旗が点在していた。村の奥2km先の山から流れ落ちてきた2m以上もある大きな岩が村の各地にあり、その被害の大きさに、診療に来た患者の災害への恐怖の意味を痛感させられた。

【活動地・診療数】

日付	市	村	診療患者数	駆虫剤投与
10日	タカナ	マハダ	70	132
11日	タカナ	サックキン	111	166
12日	タカナ	ピンピン	64	66
13日	サン・ペドロ	ピエドラ・グランデ	69	92
14日	テクン・ウマン	チキリネス	175	171
15日	テクン・ウマン	リモネス	141	242
16日	テクン・ウマン	サン・ロレンソ	175	134
合　計			805	1,003

11月14日から16日テクン・ウマン市チキリネス村、リモネス村、サン・ロレンソ村で診療を行った。当市は太平洋に近く、浸水、河川の氾濫の被害を受けた。リモネス村では、災害後1ヶ月以上経過しているにもかかわらず、村内には泥水の臭気が残っていた。

この2村では、簡易保健所で、キューバから緊急援助のために派遣されている医師と共に診療を行った。

患者は、呼吸器感染症、皮膚疾患、消化器疾患が主な疾患であった。なかには3日前に脳卒中を起こした患者もおり、国立病院を紹介した。また、アメーバー性の下痢症状を訴える患者が多くみられた。

診療最終日に、県保健局に医薬品などを寄贈した。

17日、首都グアテマラ・シティに到着。

18日、派遣者は日本とホンジュラスへそれぞれ帰国の途についた。

今回の活動中に大変ご協力をいただいた、JICAグアテマラ駐在員事務所の三澤吉孝所長始め職員の方々、山口景子様、サン・マルコス県保健局の方々、そしてＥＣＣ地球救済キャンペーン様、AMDA鎌倉クラブ様を始め日本のご支援者の方々に心からお礼を申し上げます。

AMDA沖縄　渡久地宏文（医師）

10月初めに大型ハリケーン「スタン」が中米を襲い大きな被害を出しました。その中でも特に被害の大きかったグアテマラにAMDAから派遣され、2週間の巡回診療を行ってきました。国連OCHAによると474,928人が被害を受け、死者669人、行方不明844人という大変な被害でした。

グアテマラは、歴史的に重要な国で古くはマヤ文明が息づき、また、中米のスペインからの独立では、その決定がなされた国でもあり、今でもスペインを思わせる古い町並みの残る美しい国です。

AMDAはこの豪雨災害被災者支援のために多国籍医師団を編成し、その一員として沖縄より参加しました。チームは私の他、AMDAホンジュラスからオスカル・メヒア医師、渡辺咲子看護師・調整員、エメルソン・ロドリゲス調整員、JICAグアテマラ事務所やサン・マルコス県保健局の方々等合計7名が2台の車に分乗し、毎日診療場所を変えて巡回診療を行いました。

グアテマラで集合し、一番被害の大きかったサン・マルコス県へ向かいました。私たちが到着したのは被災から一ヶ月後であったにも関わらず、いたるところで道は寸断され、復旧工事の真っ只中であり、その被害の大きさを物語っていました。診療は、教会・学校・診療所などを回って行いましたが、初期治療は終わっていましたので、その後の経過を見て回るものとなりました。サン・マルコス県の県庁所在地サン・マルコス市を皮切りに、海抜2,800mのタカナ市、海の近くのテクン・ウマン市まで多くの人を診て回りました。その中でも多くの人は寄生虫症を患っており、また、呼吸器系、消火器系の感染症のほか、子どもは栄養失調や脱水症になっていました。

現地では、医師・看護師・医薬品の慢性的な不足に悩まされていました。キューバの医療チームは、被災後すぐに現地に入り、私たちが到着した被災一ヵ月後も診療活動を行っていました。すでに医薬品は不足しており、私たちの持参した医薬品を提供するなど、彼らと連携をとって診療に従事しました。

地元の人々は、衛生面での教育不足が目立ち、特に「手洗い」「飲料水の沸騰」などの最低限の知識があれば、病気の広がりを少しでも抑えることができたのではと思いました。

全日信販株式会社・AMDAカード

11月28日、全日信販株式会社様より今年度上半期のご寄付（●AJ·AMDAカード利用 ●AJジョイフルポイント「AMDA支援寄付」 ●AJ提携カード[AMDA付き]利用等含む）をいただきました。96年からのご寄付の合計金額は、24,370,014円です。

※全日信販（株）のホームページより

AJの社会貢献

AJ・AMDAカードによる世界救援活動へご参加ください。
AJ・AMDAカードは世界のための名脇役。
AMDAを通じて社会貢献（ボランティア活動の支援）を実現する募集と資金援助をします。

■AJ・AMDAカードとは？

ショッピング、キャッシングご利用金額の0.5%（AJ負担）を資金援助。「AJ・AMDAカード」をAJの加盟店で、また、キャッシングでご利用いただいた場合にご利用金額の0.5%を援助金（全額AJ負担）としてAMDAへ提供させていただきます。現金や、他のカードでお買物されるかわりに「AJ・AMDAカード」をご利用いただくだけで、自動的に資金援助が行われる仕組みとなっています。

さらに、VISA加盟店でのお買物についてもご利用額の0.1%を援助金として提供させていただきます。

■AJとAMDA

1995年1月に発生した阪神淡路大震災は、テクノロジーがいかに発達しようとも自然災害に対しては、人間はいかに無力なものであるかを私達にあらためて知らせてれた出来事でした。弊社も神戸支店が被災しましたが、いろいろな方々のご支援等を賜り、本当に心強くありがたい気持ちでいっぱいでした。こうした体験を通して、弊社ではすでに発行していた「AJ・AMDAカード」によるこれまでの社会貢献に加え、社会活動への対応をもう一度見直し、何ができるかを検討していく必要性を痛切に感じました。

ジャスコ岡山店チャリティーバザー開催

ジャスコ岡山店では、11月3日から6日まで29周年謝恩祭の一環としてAMDAへのチャリティーバザーを開催致しました。

ジャスコはAMDAの活動主旨に賛同して1997年から協力しています。3日は餅つき大会、4日はチャリティーバザーを実施致しました。

AMDAがミャンマーに開設した小児病等の活動を紹介した写真パネルは6日までの設置と致しました。

餅つき大会は地元町内会などのボランティア約40人が65キロのもち米をつき、豆もちと大福もちを即売致しました。チャリティーバザーはお客様からの善意で集まった衣類や古本など約1万点を販売し、開店前から50人ほど並ぶ人気振りで、開店して1時間半でほぼ完売するほどの大盛況でした。

このように地域と密着した取組みによる収益金は、多くの子どもたちが感染症で苦しむミャンマー中部の医療サービス向上に、AMDAを通じて役立てていただきます。

小売業の店舗はお客様が日常お来しいただける場所であり、バザーを通じてAMDAの活動を知っていただけるという利点があります。

これからも皆様のご協力と、温かなご支援をいただきながら活動を継続していきたいと思っております。

これまでの支援活動実績

2005年11月	「ミャンマーの子どもたちに医薬品を」	320,332円
2004年11月	「南米ペルーの子どもたちをエイズから守ろう」	247,683円
2003年11月	「スリランカの子どもたちに医薬品を」	610,965円
2002年11月	「ケニアの子どもたちにも予防注射を」	495,457円
2001年11月	「ケニアの子どもたちをエイズから救おう」	602,084円
2000年11月	「ミャンマーの子どもたちに栄養給食を」	506,065円
1999年11月	「カンボジアの子どもたちに学校を」	458,819円
1999年 5月	「コソボ難民の子どもたちを救おう」	637,977円
1998年 5月	「ザンビア支援キャンペーン」	紳士服2千着 ミシン等支援物資
1997年10月	「ルワンダ難民の子どもたちを救おう」	701,108円
1997年 5月	「ネパール子ども病院支援キャンペーン」	1,566,150円

（岡山ジャスコ店CSマネージャー　高田知加子）

全日信販株式会社様、ジャスコ岡山店様からは、ともに10年の長きに渡るご支援を頂いております。全日信販株式会社・AMDAカードご利用者の皆様、ジャスコ岡山店チャリティーバザーや餅つき大会等を支えてくださるボランティアの皆様、こうした多くの皆様のご協力にAMDA職員一同大変感謝致しております。今後とも変わらぬご支援を頂けますようお願い申し上げます。

2005年秋季スタディツアー報告

2005年9月下旬にザンビア、ベトナム、ホンジュラスの3ヶ国でスタディツアーを実施しました。

【ザンビア】　2005年9月17日～9月24日　7泊8日　参加者9名
主な訪問先：リビングストーン国立公園
AMDAコミュニティ農園/コミュニティスクール
UTH（ザンビア大学教育病院）/AMDA結核治療事業
ルサカ近郊農村 Kapiri Mposhi

リビングストーンでのサファリツアー

コミュニティ農園での事業説明

参加者が事業プランを考える

参加者の感想から

★ザンビア人が非常にフレンドリーであったこと。特に理由はないが、あまり期待していなかったので、驚くとともに大変うれしかった。

★ヘルスセンターでHIVテストに並ぶ人の列の多さ。非常にオープンである。

★国立病院の重症の患者さんのあつかいがあまりにも不十分で、残念に思いました。

★教育病院を見学中、外科の入院病棟で、強烈な刺激臭がした事が記憶に残っています。床掃除の洗剤の臭いだとの事を看護師の方から伺いました。臥床されている患者の方には、ずっとあの刺激臭に耐えておられたのでしょうか…。

★治安が悪いから仕方ないと思うが、少し町を自分の足で歩いたりしたかった。また、自由時間というか1人になれる時間は少しでもいいから欲しかった。

★カニャマ地区の訪問は、都市の訪問の後だったのでインパクトがあった。ザンビアを訪れて、初めて衝撃をうけた。実態がみれた気がした。

★全てが印象に残っている。車の故障やガス欠などのハプニングも逆に楽しかった。現地の人々が明るく親切なことがうれしかった。もっと現地の人達との生の交流（治安が許せば民泊とか？）や、現地での自由行動時間も増えるといいと思う。その上で、開発のあり方について話し合う時間・機会をしっかりと確保した方がいいと思う。移動の車中ではなかなか話し合えない。

途中オーバーヒートした車にみなさんのミネラルウォーターをいただいたり、ザンビア国内のガソリン不足の影響でガス欠になったレンタカーを押していただいたり、道中大変だったそうですが、「それもアフリカ」と温かい言葉をいただき、ありがとうございました…。

【ベトナム】　2005年9月18日～9月25日　参加者11名
主な訪問先：ホアビン省立病院/ダバック郡立病院/タンザンコミューンヘルスセンター
JICAホアビン省保健医療サービス強化プロジェクト事務所
ディエム2村ヘルスポスト

JICAプロジェクト訪問

ボートでタンザンコミューンへ移動

ディエム2村でヘルスワーカーによる保健教育の事後反省会に参加

参加者の感想から

★コミューンまでの徒歩での移動が多く体力のない私にはみなについていけるか不安だったのですが、度々お昼寝できる程度の休憩をとってもらえたので、助かりました。また、陽射しが強い時間の移動を避けるなど天候も考

慮してもらえたのもよかったです。

★県・省レベルからコミューン・村レベルまで各段階にどのような組織が関わっているのか、AMDAの位置などがわかりやすいプランでした。また、チェン村の使われないままボロボロになっているヘルスポストは、物資の提供だけではなく、人材育成、啓発活動が非常に重要であることを示す、非常によい例でした。また、病院で、医療従事者の賃金の低さ故のモチベーションの低さのようなものを知ることができたのも、貴重な機会でした。

★（最も印象に残ったのは）川風呂。つめたかったけど、みんなでワイワイ入って気持ちよかった。その上。満点の星空、蛍のともしび、最高でした。おばちゃんだちにも手つだってもらったり、本当、おばちゃんたちがやさしくて、体のこともきづかってくれて、本当にありがとうございましたと心から感謝しました。

★途上国の一次医療から三次医療までの幅広い医療現場を見ることによって、これまで本やさまざまなメディアから得てきた知識をより確かなものにし、又、修正していくことが出来ました。ただそれ以上に、途上国の中でも貧しいといわれる地域に住む人々と同じ道を歩き、同じ空気を吸えたことが、たった数日間でしたがとても嬉しかったです。

★村での夕食後のダンス（？）が最も印象に残っています。みんなが楽しそうに笑いながら踊っている中に自分もいられてとても幸せでした。毎日があんな風では当然ないと思うのですが、それでも街の人の無表情さに比べると心の底から笑えている様な村の人々の笑顔はとても素敵でした。

★「驚いた」という意味では、30分でも1時間でもおとなしく話を聞いていられる子どもたち。私が今まで見たことのない光景でした。今、振り返ってみると、私たちのツアーに協力してくれたベトナム人は皆有能で、でも気負いなどは見られなかった。同行してくれたスタッフは私たちのこともよくみていて、何かとさりげなく気にかけてくれていた。2次、3次医療では規模が大きくなり、求められる内容レベルも高くなる。日本の病院でも問題は山積みであるが、ベトナムでは医師や看護師の待遇等が良くないこともあり、深刻な問題が多いだろうことは容易に予想できる。でもきっと、時間をかけて、ベトナム人の手によって改善していけるという希望を持てると私は感じている。

ベトナム到着の際、台風の影響で着陸を3度もやり直すなど、飛行機も相当揺れたようです。初めての海外旅行の方もいらして、心配されたのではないでしょうか？

【ホンジュラス】 2005年9月19日～9月29日 参加者4名
主な訪問先：コパン遺跡
エイズ予防教育（首都テグシガルパ市）
コミュニティ薬局／農林業振興事業／
伝統的産婆育成と妊娠適齢期女性教育事業（以上トロヘス市）

コパン遺跡でガイドから説明を受ける

青少年との交流会

トロヘスの農林業振興事業視察

参加者の感想から

★テグシガルパでの無邪気で明るく、元気な人懐こいホンジュラスの子供たちや、トロヘス地方の辺境の地で薬局の運営などで、人々の健康や、家族計画や、農業・林業の開発にボランティアーとして活動している土地の人々に会えたこと、そしてロナルド君のお父さんや、兄弟姉妹にも会えたことは大変良かったと思っています。

★植樹と段々畑農法が出来れば豊かになれるかも（？）と。まず、自然破壊を行わない範囲の道路が必要と思われる。

★農村地域の生活環境の厳しさ：保健医療サービス、教育、などあらゆる面でアクセスが難しい状況下から、人々の生活が貧困から脱出できないサイクルにあるように思いました。でも、そこに、AMDAが、人々が自力で発展できるような援助をされていることや、それらのプログラムの1つ1つが、軌道にのり始めているところなどを見せて頂いて、感動しました。何もないところから物事を始めることの非常に大変なことと同時に、創意工夫が実を結ぶときの達成感の大きさを感じました。

なかなか訪れる機会のない中米、ホンジュラスのツアーはいかがでしたでしょうか？もっとも移動の多いツアーだったため、参加者のみなさんからは、もっと事業が見たい！というご意見もありました。

株式会社 道祖神
The Travelers Guardian Inc.
〒108-0014 東京都港区芝5-13-18 MTCビル9階
TEL：03-3455-6111 FAX：03-3455-2442
〒530-0001 大阪市北区梅田2-5-25 ハービスPLAZA3階
TEL：06-6343-7725 FAX：06-6343-6328
ホームページ： http://www.dososhin.com
メールアドレス： info@dososhin.com

AMDA関係
刊行物のご案内

・お問い合せは、AMDA本部事務局まで。
TEL 086-284-7730　FAX 086-284-8959
・お申し込みは、郵送かFAXでお願いします。
・お支払いは、郵便振替でお願いします。送料別。
口座 AMDA出版　口座番号 01220-6-12076

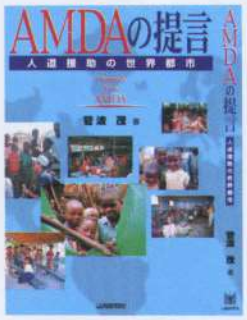
AMDAの提言

—人道援助の世界都市—

・菅波　茂著
・出版元　山陽新聞社
・1996年11月25日発行

岡山から世界に飛び出し、国際的な医療NGOとして知られるAMDA。その代表の著者が問いかけ、提案する。「日本は経済大国から、人道援助大国をめざせ。岡山に世界へ向けての人道援助ネットワークの拠点を築こう」と。

256頁



ISBN4-88197-607-9 C0036　P1600E

定価1,680円

AMDA緊急救援 出動せよ！

—緊急救援10年の軌跡—

・三宅和久　著
・出版元　吉備人出版
・2003年2月14日発行

国境を越えた緊急医療活動で世界的に知られるまでになった国連NGO・AMDA。10年間に15回以上の緊急救援活動に参加した三宅和久医師が、現場で直面し、感じた人道援助の実際。1冊購入につき100円がAMDAに寄付されます。235頁

ISBN4-86069-027-3　C0095

定価1,470円

ルワンダからの証言

—難民救援医療活動レポート—

・AMDA著
・出版元　中山書店
・1995年4月3日発行

援助大国とはいえ、国際的なNGOに比べると組織は小さく財政的にも弱い日本のNGOが、劣悪な環境の中でルワンダ難民のために活動した記録。

200頁

ISBN 4-521-00541 C0030　P2000E

定価2,100円

遥なる夢

—国際医療貢献と地域おこし—

・菅波　茂　著
・出版元　AMDA
・1993年9月20日発行

AMDA設立までの経過と活動記録。AMDAに関わった人々について紹介すると共にAMDAの展望と日本のNGO活動への提言。

316頁

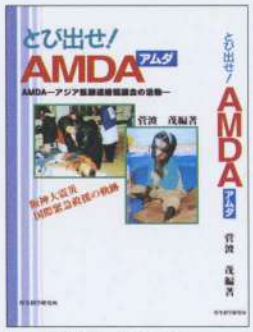
定価　500円

とびだせ！AMDA

—AMDA・アジア医師連絡協議会の活動—

・菅波　茂著
・出版元　厚生科学研究所
・1995年7月15日発行

第1部　阪神大震災におけるAMDA医療ボランティアの動き。緊急救援活動における後方支援体制。防災への提言。
第2部　国際緊急救援での活動記録。バングラデシュ、ネパール、カンボジアやルワンダ、ソマリアなどの紛争地区での難民救援活動の記録。270頁



ISBN 4-905690 21-8 P1800E

定価1,890円

はばたけ！NGO・NPO

—世界の笑顔にあいたくて—

・ひろしま国際センター編
・出版元　中国新聞社
・1998年3月25日発行

自然災害・難民救済・環境破壊・高齢者福祉など様々なボランティア活動は国内だけでなく国際的な広がりが求められています。広島県と共同開催の第一回NGOカレッジの講義録で、国際ボランティアを志す人に必携の書。328頁

ISBN4-88517-263-2 C1030　P1800E

定価1,890円

医療和平

—多国籍医師団アムダの人道支援—

・菅波　茂　著
・出版元　集英社
・2002年5月2日発行

21世紀を生きる子ども達の命を救いたい！AMDAは北部同盟とタリバンの保健担当者を岡山に招聘。AMDAのアフガニスタン国内医療和平構想に両者は快諾し協力を約束してくれたが…救える命があればどこへでも行くAMDAの緊急救援活動と危機管理。　225頁

ISBN4-08-78　1262-6　P1500E

定価1,575円

トラベルには、
トラブルの備えを。

TOKIO MARINE NICHIDO
ミレアグループ

◎世界各地からの相談に24時間365日、
日本の海外総合サポートデスクで集中対応。

◎提携病院で、現金なしで治療が受けられるキャッシュレス・メディカル・サービス。

◎快適なご旅行をお楽しみいただくために、事故や病気の有無に
かかわらずご利用いただけるサービス「トラベルプロテクト※」付き。
※トラベルプロテクトは、保険期間3ヵ月までの弊社がおすすめする「タイプ契約」に限ります。

ワールドワイドなネットワークであなたの旅をバックアップ
海外での安心のパートナーには、ぜひ東京海上日動をご指名ください。

海外旅行保険

海外旅行傷害保険（海外旅行保険特約付）

東京海上日動火災保険株式会社　東京都千代田区丸の内1-2-1 〒100-8050
お問い合わせ先：0120-868-100 平日/午前9:00～午後6:00（土日・祝日は休日とさせていただきます。）
ホームページアドレス　http://www.tokiomarine-nichido.co.jp/

東京海上日動

AMDA Journal — 国際協力 — 2006年1月号

2006年1月1日発行（毎月1日発行）VOL.29 No.1　1995年11月27日　第三種郵便物認可　定価600円
発行／AMDA　〒701-1202　岡山市楢津310-1　TEL 086-284-7730　FAX 086-284-8959

AMDA ホームページ
http://www.amda.or.jp/